

## 四つの第二言語の習得を経験して

武村朝吉

### 要約

筆者は四つの第二言語の習得を経験してきた。二つ目の第二言語だけは驚異的なスピードで習得することができたが、他の三つは必ずしもスムーズなものではなかった。習得がスムーズだったものとそうではなかったものの相違点を見つけ、そこから考察を重ね、母語獲得と第二言語習得の説明に有効だと思われる四つの仮説を得た。

### はじめに

子供の母語獲得と大人の第二言語習得<sup>1)</sup>は大きな謎である。

文法を理解する能力が殆どない子供が均しく母語獲得に成功する一方で、幾多の優れた文法書に学ぶこともできる、高い理解能力を備えた大人が第二言語の習得に難渋する。しかも、子供は極めて混沌とした状態のパロール<sup>2)</sup>からの母語獲得に成功し、大人はラング<sup>3)</sup>の中に見出され理路整然と整理された文法を供されてなお第二言語の習得に難渋する。好対照を成して存在するこれら二つの事実の差は甚大である。

筆者は四つの第二言語の習得を経験してきたが、四つの内、二つ目の第二言語だけは驚異的なスピードで習得することができた。習得がスムーズにできたものと、できなかったもの、二種類の習得状況にどのような相違点があったのか。驚異的なスピードで第二言語を習得するという、極めて特異な体験をした当事者として、強く興味を引かれ長年に亘って考察を続けてきた。本稿は、その考察の結果をまとめたものである。内容の性質上、実証的に論述することが極めて難しく、専ら論理的考察に頼ったものであるが、母語獲得と第二言語習得の全体像の素描を得ることを目的とした。

1. 1. 子供が均しく母語の獲得に成功する所以は、子供の脳には生得的に“言語獲得装置 (Language Acquisition Device)”があり、そこに“普遍文法 (Universal Grammar)”<sup>4)</sup>が備わっているからだとか肯定的に説明されている。一方、大人の第二言語習得の難しさについては“臨界期仮説” (critical period hypothesis)<sup>5)</sup>という制限項目を設けて否定的な解釈が加えられている。

“臨界期仮説”に関しては、その後、次のような異なっ

た見解が提示されている<sup>6)</sup>。Snow & Hoefnagel-Höhle (1978) は「若ければ若いほど上達する」への反証を示した。Krashen, Long & Scarcella (1979) も初期段階においては成人学習者の方が統語形態領域では習得が早いとしながらも、子供の方が最終的には大人よりも習熟度が高いことを指摘した。Johnson & Newport (1989) は、第二言語の話される国へ何歳で移住したかという学習開始年齢が、最終的到達度を決定する唯一絶対的要因であると主張している。

2. 1. 筆者は南米ボリビア共和国で生まれ育った。家庭では母語のウチナーグチ<sup>7)</sup>、学校ではスペイン語。現地の学校で中1まで受けたスペイン語教育は、“臨界期”以前に経験した初めての第二言語の習得であったが、移民子弟が大半を占める学校であったためか、特別スムーズなものとは感じられなかった。

その後、12歳で帰国し、日本語環境 (小6) へ。当初筆者の日本語能力は至極簡単な会話ができる程度で、教壇に立つ教諭の話が理解できず、当てられた国語の教科書も読めずその場に立ち尽くしていた。自分以外の全ての子供たちが非常に賢く見える四面楚歌の環境で、頭の中から二本の透明なアンテナを伸ばし、回りの子供たちの話し方の些細な何かを聴き集めているような日々。頭の中がむず痒いような、頭の中が塗り替えられて行くような感覚。3ヶ月で日常会話に困らなくなり、半年で授業内容が理解できるようになっていた。

しかし、半年後、ボリビアから一時帰国していたある方<sup>8)</sup>からウチナーグチで話しかけられた時には、日本語しか話せない子供に変わっていた。母語のウチナーグチは退き、二つ目の第二言語の日本語がそれに取って代わっていた。ウチナーグチは、相手の話は理

解できても、話せない。そればかりか、以前自分自身がどのようにその母語を操っていたかが思い出せない。頭の中に蓋をされたような、母語との繋がりを断ち切られたような感覚。

大学在学中は、大学へ通う傍ら、多くの時間を南米出身の友人たちとスペイン語で過ごし、卒業後は、台湾3年、カナダ半年、北京6年間の留学で、中国語と英語の習得を経験した。英語は、中学・高校・大学で長年学んだ後の留学だったし、中国語も執念を以って臨んだものであった。しかし、これら第二言語の習得は、費やした時間と傾注した努力の多大さからすると、必ずしもスムーズなものではなかった。

二つ目の第二言語の習得を驚異的な速さで成功させた要因は何だったのか。そして、それ以外の三つの第二言語の習得がスムーズに行かなかった要因は何だったのか。

#### ➤ 驚異的な速度で習得に成功した日本語の場合

筆者が日本語環境に入って間もなく、家庭内でも日本語が話されるようになっていた。当時南米ボリビアからの帰国は、ゼロからの再出発以外に選択肢がなく、後戻りが許されない、極めて切実な覚悟を強いられるものであった。その覚悟があつてか、子供たち<sup>9)</sup>も両親も一月も経たない内にウチナーグチを話すのをやめ、自然と日本語で話すようになっていた。

筆者が日本語を習得した状況は、利き手ではない手で箸の使い方を練習する状況によく似ている。利き手ではない手でも自在に箸が操れるようにしたければ、そうなるまで決して利き手で使わないこと。驚異的なスピードで進んだ日本語習得の背景には、そういった絶対的な必要条件が満たされていたという基盤があった。

#### ➤ 必ずしもスムーズではなかった、三つの第二言語の場合

臨界期以前に南米ボリビアで受けたスペイン語による教育も、大学進学後のスペイン語も英語も、そして中国語の場合も、第二言語の習得環境としては、筆者はかなり恵まれた言語環境に置かれていた。しかし、その言語環境は母語と二本立てのものでも、第二言語が辛く感じられた時はいつでも母語環境への一時避難ができてしまうものであった。前述の箸の練習に話を戻してイメージすると、利き手を使いながらの場合、

利き手ではない手で使う箸はなかなか上達しない。そのような単純なことが、第二言語のスムーズな習得を妨げる要因として働いていたと推測される。

上記のように際立った相違点を整理してみると、成否の要因が浮かび上がってきているように思われる。

“臨界期”との関連性の精査を欠きながらも、母語を封印し第二言語の言語環境を生活の基盤とした場合、第二言語の習得は極めてスムーズなものになるということは充分言えよう。しかし、驚異的な速さで進んだ第二言語の習得を経験した当事者としては、その成功の要因を解く鍵は、母語を封印するという表層的な部分ではなく、それに連動して発生する深層部分における変化、すなわち、筆者が体感したあの異様な感覚の中にこそ、その鍵は潜んでいるのだと直感している。

2.2. ヘレン・ケラー女史がサリヴァン先生の導きによってw-a-t-e-rを理解する情景は圧巻である。女史は『ヘレン・ケラー光の中へ』<sup>10)</sup>でその時のことを以下のように回想している。

こうした記号を使えば私も人に意志を伝えることができるのだということを、私は理解したのです。——中略——前へ後ろへすばやく駆けめぐり思考がやってきました。思考は、頭から出て全身にくまなく広がってゆくようでした。——中略——凍りついた冬の世界に陽がさすように、あの“水”という言葉が私の心の中に沁みこんでいったのです。この素晴らしい出来事が起こる以前の私には、食べて飲んで寝るといふ本能のほかは何もありませんでした。私の日々は、過去も現在も未来もなく、希望も期待もなく、好奇心も楽しみもない空白だったのです。

一月前からサリヴァン先生が物の名前を教えようと、女史の手に色々な物をつかませては、手のひらに指で物の名称の綴りを書いたり書かせたりしていた、それにも関わらず、女史は自分が何をしているのかさっぱり分かっていなかったと回想している。しかし、認知した物と言葉が結びついた時、上掲の奇跡は起こった。女史の言う「凍りついた冬の世界に陽がさすように、あの“水”という言葉が私の心の中に沁みこんでいく」という表現は、触覚を通して認知されていた物とw-a-t-e-rという言葉の関係性を理解したことを表すものとしてはあまりに誇張的過ぎる。その表

現は、物と言葉との一対一の結びつきを超えて、劇的かつ壮大な変化が起こったことを表現しているように感じられる。女史が表現する体験は、“凍りついた闇の世界に陽がさす変化”，“言葉の理解が心の中に沁みわたるような変化”である。その尋常じゃない表現は、言葉を脳内に吸収した直後から、脳内で劇的かつ壮大な変化が発生したことを表しているのだと理解されるべきであろう。すなわち、脳内に吸収された言葉の運用能力を獲得すべく、急速に拡散して行った脳細胞間相互のネットワーク化である。

脳内に発生し広がって行くネットワーク化は、脳自体の成長・変化であるが、同時に、吸収された言葉を起点とし、それ抜きには進展し得ないネットワーク化である。その成長・変化を観察する視点をその起点に向けた場合、以下のことが言えるのではないだろうか。

仮説1：脳内に吸収された言語は脳内の成長・変化を促す。

2.3. 子供の母語獲得という行為は、母語を獲得する行為の主体である子供と、その行為の対象となる母語、この二者が関連する行為である。物理学では、二つの振動体は固有振動数が接近した時に共鳴するとされる。二つの振動体は共鳴状態に至って同周波数で振動する、つまりスムーズな振動を共有するのだから、二者が関連する行為も、二者が共鳴した状態の時に最もスムーズなものとなると推測できる。このように考えると、子供の母語獲得成功の所以は、子供の持つ何らかのものと母語の中にある何らかのものとの間に共通点があることによる可能性が高い。母語獲得の前後は行為に動きはないので、共通点は、母語獲得の前後ではなく、母語獲得の行為の中にあるということになる。

ドイツの動物学者ヘッケルは個体発生（固体が発生する過程）は系統発生（その動物が進化してきた過程）を繰り返すとする発生反復の法則<sup>11)</sup>を唱えた。子供の母語獲得における、行為主である子供と行為の対象である母語の間にも、このような法則性が存在しているのではないか。つまり、子供の認知機能が発達して行く順序と、獲得される母語の発達してきた順序が共通（共鳴）することが、子供の母語獲得を成功させている法則だと思われるのである。

言語は人間社会において創られ、使われてきた。人

間社会は複数の人間で構成されているから、言語は平均的な一人の人間によって創られ、使われていることに等しい。手に握られた箸が指先の繊細な感覚を末端まで伸ばすように、人間の認知機能の発達に即して、言語は人間の認知機能の延長線上に創られ、その延長線上の道具として使われる。言語の使い勝手は逐次フィードバックされ、不具合や不足は矯正と新たな創造へつなげられる。そのようなサイクルの中で、悠久の時を経て、言語は体系化<sup>12)</sup>され膨大な情報ネットワークとなった。創る側と使う側、どちらの主体も人間であるという点において、人間は言語の主宰である。言語はその主宰である人間を欠いた状態では無機質な記号の総体であると見なされる。しかし、主宰である人間とつながった状態では、以下のことが言えるのではないだろうか。

仮説2：言語はその主宰である人間と繋がった状態では、仮想生命体のように稼働する、一つの巨大な有機体と見なすことができる。

2.4. 第二言語習得の過程で発生する奇異な現象がある。筆者は北京留学中、購読していた新聞の内容も、長時間観た連続ドラマも、中国人の友人とのお喋りの内容も全てが日本語に置き換わってしまっていることに気づき愕然とさせられたことがあった。なぜ、第二言語で理解できていた筈の内容が、知らない内に日本語に置き換えられてしまうのか。そのメカニズムはどのようなものなのか。“言語はコミュニケーションのツールである”という定義を超え、考察を重ねた結果、以下の理解を得た。

#### ①「認知機能を発達させるツール」

根拠：子供は認知機能が未発達な状態から母語の獲得を開始する。認知機能が未発達な状態で、母語の獲得ができるということは一般的にあり得ない。しかし、認知機能の発達と脳内に吸収された母語情報の増幅が同時進行し、一方の発達が他方の増幅を促す要因となる、そういった協働関係にある両者の発達・増幅が相乗効果を生むことによって、あり得ないことを可能としているのではないか。

#### ②「長期記憶を整理し定着させるツール」

根拠：想起され記憶は、殆どが言語を伴って再現される。逆説的に考えると、言語があって初めてそれら記憶は整理・定着されたということになる。幼児期の記憶が殆ど想起されることがないのは、言語の吸収が不十分で、長期記憶を定着させるツールとして機能していないことを示しているように思われる。

### ③「思考のツール」

根拠：私たちは、(静的・動的)イメージを待っている所謂「沈黙の思考」の時以外は、何か考えごとをしている時、通常、言語によって内容(ストーリー)の整理を繰り返しながら、考えごとを反芻し結論へと繋げて行く。特に、長いストーリーを持つ考えごとは、言語抜きでの思考はできない。

### ④「学習のツール」

根拠：人間の学習は動物のそれとは根本的に違う。動物の学習はその殆どが己の体験からの学習に限定されるが、人間の学習はそれに留まらず、他者の体験からの間接的な学習が可能である。間接的な学習は時に距離も時間も超越し、人類の飛躍的な進化を実現する原動力となってきた。言語は正に人間の学習を媒介するツールであると考えられる。

言語が上記の①「認知機能を発達させるツール」、②「長期記憶を整理し定着させるツール」、③「思考のツール」、④「学習のツール」として働く状況を総合的に捉えると、言語が人間の脳内に在ってパソコンのオペレーション・システム(以下「OS」)に近い役割を担っている状況が見えてくる。

仮説3：脳内で母語OSが稼働している

2.5. 第二言語の習得で多くの人を悩ませている奇異な現象がもう一つある。淀みなく流暢に会話ができるレベルまで習得した第二言語も、長期間話さないと、その流暢さが損なわれて行くという現象である。誰もが経験する、錆びついたように口が回らなくなって行く極当たり前の現象である。

このような現象は、発声器官自体ではなく、そこに伝えられる信号又はその伝達系に起因するものとして捉えられるのが一般的であろう。信号と伝達系は次の

ようにイメージできるのではないか。信号の正体は微弱な電流で、その伝達系は、個々のシナプスから軸索突起を通して別のシナプスへ、関連する四方八方の脳細胞へ拡散して行く蜘蛛の巣状のものである。そのイメージを単純化して表現すると、以下のようになる。

仮説4：脳内に体系的に構築された膨大な言語データネットワークは、微弱な連流が流れる無数の回路から成る。

3.1. 前章で提示した四つ仮説によって、子供の母語獲得と大人の第二言語習得は以下のように説明できるものと思われる。

## 子供の母語獲得

言語は、その主宰である人間と繋がった状況下では、人間の脳内の成長・変化を促す有機体として働く。それが認知機能の未発達な幼児が母語の獲得を開始することを可能としていると考えられる。また、母語が辿ってきた進化の過程と、子供の認知機能が発達して行く過程の間に共通点が存在していることが、子供が均しく母語獲得に成功する所以であると考えられる。従って、母語獲得の過程は、子供の認知機能の発達に即し、一語文期から、二語文期、多語文期へと、母語の通時的な発達の過程を再現するように、母語の言語情報を蓄積して行くものであると思われる。子供はこのように母語の獲得を続け、一定期間内にその基幹部分の吸収作業を完了する。認知機能も一定の成熟度を達成するこの時期が“臨界期”と呼ばれるものであると考えられる。

## 大人の第二言語習得

大人の第二言語の習得を難渋させる要因として、次の三つが考えられる。要因一、大人は母語獲得時に認知機能の発達が完了しており、第二言語習得のプロセスに在って第二言語の通時的な進化の過程を再現することができない。要因二、大人の脳内では母語OSが強力に稼働しており、第二言語の習得過程、特にその初期段階においては、第二言語OSが殆ど稼働していない。要因三、母語OSに依る学習で吸収された第二言語の情報は脳内に散在し、未だネットワーク化には至らない状態にあると想像される。

要因一のため、大人の第二言語習得／学習においては、認知機能の発達が第二言語習得を促すという相乗効果を生むこともなく、難易度に沿った効率的なプロセス辿ることもできない。また、要因二のため、第二言語で理解した内容が母語に置き換えられてしまう等の現象も発生する。このような現象は、同時に、第二言語関連の多くの情報が破棄されていることも暗示しており、第二言語習得を難しくしている根本的な原因になっている可能性も危惧される。そして、要因三のため、第二言語OSが稼働する状態に至らない。

なお、第二言語学習の初期段階から、第二言語OSを稼働させようとする学習／教育方法は、要因二及び要因三のため、第二言語OSによる学習自体が成立しないという盲点を孕んでいるものと思われる。

## 最後に

“言語”は、その主宰である人間とどのように繋がり、一つの巨大な有機体をなしているのか。その状況を説明するためには、現行のミクロ文法を超えたマクロ文法が必要になってくると、筆者は漠然とイメージしている。今後、そのテーマにも挑んで行きたいと思う。

<sup>1)</sup> 本稿では、基本的に第二言語環境における（第二言語学習を含んだ）言語習得という意味で用いている。

<sup>2)</sup> 個人の中で考察される言語。フェルディナン・ド・ソシュール (Ferdinand de Saussure) が分けた定義。

<sup>3)</sup> 個人個人において言語活動の能力の使用を確約するために、社会集団によって採択されている、必要な約定のたぐいの全体（集合）。フェルディナン・ド・ソシュール (Ferdinand de Saussure) が分けた定義。

<sup>4)</sup> 全ての自然言語に普遍的に共通する文法。ノーム・チョムスキーによって提唱された。

<sup>5)</sup> Eric Lenneberg (1967) の母語・第二言語の回復・修復可能年齢が思春期 (12~13歳) であるとする研究。白畑知彦・若林茂則・村野井仁 (2010) 『詳説第二言語習得研究理論から研究まで』 p.168参照。

<sup>6)</sup> 前掲書 pp.169-184

<sup>7)</sup> 沖縄方言。

<sup>8)</sup> 1975年8月当年開催中の沖縄海洋博覧会に合わせて一時帰国していた四十台の男性。筆者はボリビアにいた頃はよくその方と敬語体のウチナーグチで話をしていた。

<sup>9)</sup> 筆者と兄と姉の三人。姉 (15歳) 兄 (18歳) も筆者と同じように短期間で日本語習得に成功した。

<sup>10)</sup> ヘレン・ケラー著 島田恵訳 『ヘレン・ケラー光の中へ』 めるくまー。pp.203-204

<sup>11)</sup> ドイツの生物学者・哲学者Ernst Heinrich Philipp August Haeckelが生物学のテキスト (1874年) で提唱。

<sup>12)</sup> 体系化の中には、難易度の順序もあると思われる。Krashen (1977) が「自然な学習順序仮説 (Natural Order Hypothesis)」で言及しているのがそれに当たると思われる。

## 参考文献

1. Ferdinand de Saussure著 山内貴美夫訳 (1971) 『ソシュール言語学序説』 勁草書房。
2. ヘレン・ケラー著 島田恵訳 (1992) 『ヘレン・ケラー光の中へ』 めるくまー。
3. 鈴木孝明・白畑知彦著 (2012) 『ことばの習得』 ころしお出版。
4. 白畑知彦・若林茂則・村野井仁 (2010) 『詳説第二言語習得研究 理論から研究まで』 株式会社研究社。
5. Rod Ellis (1994) *The Study Of Second Language Acquisition* Oxford University Press.
6. 植田利喜造・鈴木恕著 (1982) 『シグマ・ベスト<新課程>解明生物II』 文英堂。
7. 力武常次・後藤憲一・北村良夫・清水光治著 (1978) 『基礎からの物理 I』 東京 数研出版。

# Reflections on experiences in acquiring four second-languages

Tomoyoshi Takemura

## Abstract

In this paper, I examined the acquisition of four languages with which I have personal experience other than my first language, and determined that these experiences may be classified into two types: those that could be acquired without difficulty and those whose acquisition entailed difficulty. Next, the differences between these were examined to generate several hypotheses that may be useful in first-language acquisition as well as second-language acquisition.